
軒下の二人

とび

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

軒下の二人

【Nコード】

N8488G

【作者名】

とび

【あらすじ】

蘭達の買い物に付いてきたコナンは、にわか雨に降られて一人雨宿りをしていた。そこに駆け込んできた、もう一人の若い男。彼の顔は工藤新一に似ているのだが……

「いきなり降ってきやがったな……」

江戸川コナンは顔をしかめながら服についた雨粒を払い、雨宿りの軒下から鉛色の空を仰いだ。――強く降ってはいるが、多分、にわか雨。

しかしこの雨足では、傘を持たないコナンは暫くここを動けそうになかった。

やっぱり蘭と園子の買い物に付いてきたのが間違いだった。長くなる事は分かっていた筈なのに……。二人は、まだあの店にいるのだろうか。

ため息をついた時、この軒下にもう一人駆け込んできた。

何とはなしにコナンが隣を見ると、若い男が先程のコナンと同じように服を払いながら空を見ている。おそらく、工藤新一と同じくらいの歳だ。

視線に気付いたのか、こっちを向いた男と目が合った。

その男の顔を、何故かコナンは懐かしく思った。理由は、分かりそうで分からないけれど。

コナンと視線を交わらせた男は一瞬だけ微妙な表情をし、その一瞬はコナンに違和感を抱かせたが、

「……よう、ボウス。オメーも雨宿りか？」

しかし何事も無いように男が話かけてきたので、コナンはその違和感を保留にし『子供』の笑顔を顔に貼り付けた。

「うん、そうだよ。それにしてもヒドイ雨だよね」

「ああ。急に降ってくるんだもんね」

「でも、きつとにわか雨だよ」

「つつても、まだしばらく動けねえな……」

二人の視線の先の空は、いまだ暗い色を湛えたままで、雨が弱まる気配はない。

コナンのポケットの中で携帯が鳴った。

蘭からのメールだ。突然の雨でこちらを心配する内容と、しかし買い物はもう少しかかるといふ一文。

「ボクは大丈夫だよ。だから気にしないで」

コナンはそう返信したが、本心……つまり『新一は』まったく逆の意見だ。

(まったく……何で女つてのは)

「何で女つてのは、ああ買い物がなげえんだよ」

心の中で呟いた言葉が直接耳に入り、コナンは息を飲んだ。その言葉を口にしたのは隣の男だ。

男もコナンと同じように携帯の画面を睨んでいた。今の悪態は、携帯の向こうの相手についたらしい。

呆気にとられているコナンをよそに、男はブツブツ文句を言いながらメールを打っている。その文句の中から、『アオコ』という女の名前が聞こえた。それがメールの相手なのだろうとコナンは思っ

た。

「ん？ どうした？」

携帯を閉じた男がコナンを見て首を傾げた。

無意識のうちに男を凝視していた事に気付いたコナンは、しまった……と内心で慌て、笑って気まずさを誤魔化した。

「あ……えっと、お兄ちゃんも誰か待ってるの？」

「？」

「ボク、お姉ちゃんと買い物に来ただけど、まだかかるんだって……そうか。そりゃ奇遇だな」

男はしゃがみ、コナンと目線を合わせた。

ただそれだけの動作。だがそれだけで、コナンは先程感じた違和感の正体を識ってしまった。理屈よりも早く、心でそれを理解した。この男とは会った事があり、この男もそれを分かっている。

そんなコナンの心情を知ってか知らずか、しゃがんだ男は朗らかに笑った。

「オレもオメーと同じで、幼なじみの女と買い物に来たんだ。でもなげえんだよな、コレが」

長くなるの分かって付いてくるオレもアホだけど……と男はため息をついた。動揺しつつ、思わずそれに同感したコナンもため息を一つ。

「けどよお……」

しゃがんだ膝に肘を置いて頬杖をついた男は眉をひそめ、その幼

なじみへの文句を並べ始めた。

近く接してみたら、この男は自分と——つまり工藤新一と似ている事に気付いた。それは少なからず心外だったが、最初に感じた懐かしさは、その為だろう。

まず単純に、顔が似ている。

顔だけではない。幼なじみの彼女に向ける気持ちも、きっと似ている。

「口うるさい」とか「おせっかい」とか、幼なじみに対する悪口を並べていても、言葉の端々や時折見せる穏やかな笑顔から、彼女を愛おしむ心が滲み出ている。

自分も、誰かに蘭の事を話している時はそんな顔をしているのだろう。そう思ったら、少し面映ゆくなった。

「……けどさ、お兄ちゃんはその人が好きなんですよ？」

意地悪だと知りつつコナンが男に尋ねたら、案の定、男は顔を赤くして否定しようとしたが、しかしすぐに苦笑してコナンから視線をずらした。

「ああ。オメーがそう思うなら、きっとそうなんだろうな」

コナンと男が他愛のない雑談を交わしている間に、雨の音は随分軽くなっていた。雲間から微かに陽光が射し込み、傘を持たない人の姿もチラホラと見える。

「そろそろ出てつても大丈夫だな」

コナンと一緒に雨宿りしていた男は、軒下から外に出た。
男の足元に、影が薄く伸びる。

「じゃあな、ボウズ」

「待って！」

咄嗟にコナンは男を呼び止めた。

「何だ？」

「次は……いつ会えるかな？」

「次？ そうだな……」

男は少し考え、そしてゆつたりと口の端を吊り上げた。

「まあ、機会があれば、そのうちに」

そのまま男は走り去り、コナンも今度は黙って彼を見送った。

悪い奴ではない。

工藤新一としてあの男と、陽の下で出会っていたなら仲良くなれたかもしれない。しかし、それは考えてもどうにもならない事だ。
男の名前は、ついに訊かなかった。訊く意味がない。仮に尋ねたとしても、はぐらかされただろう。

「運命の齒車ってのは、上手く噛み合わねえもんだな。……なあ？
コソ泥さん」

雨はもう、止んでいる。

コナンも軒下から出て、男とは逆の方向へ足を向けた。
二人が去った軒下に、名残の雫がひとつ、陽光を弾いて落ちた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8488g/>

軒下の二人

2010年12月29日18時10分発行